

# 連載講座

## クローズアップ “火災” (6)

### —消防統計からのアプローチ—

#### 初期消火の話 (その1: 初期消火従事状況)

財団法人 消防科学総合センター  
主任研究員 日野 宗 門

火元建物にほとんど損害を与えずに火災を初期のうちに消火することは消防関係者の大きな夢であろう。現実においては財政力等の問題から公的消防 (= 自治体消防) では、「火元建物の焼失はやむを得ないが隣家建物への延焼は阻止する」ことを目標して消防力の整備が進められている (このような考え方をもとに「8分消防」の考え方が導き出されている)。

それだけに、自治体消防が到着するまでの間に、火元建物の管理者、居住者等が行う初期消火活動に期待されるところはきわめて大きいといえる。

今回及び次回では、この初期消火活動の実態に迫るが、第1回目の今回は、初期消火活動への従事状況を見ることにしよう。

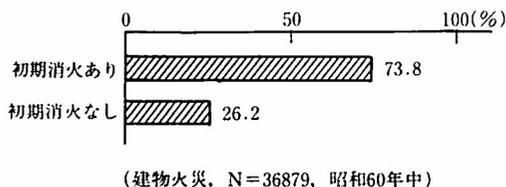


図1 初期消火従事状況

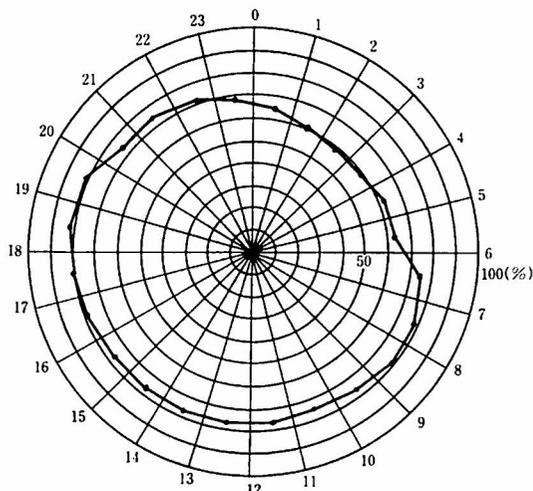
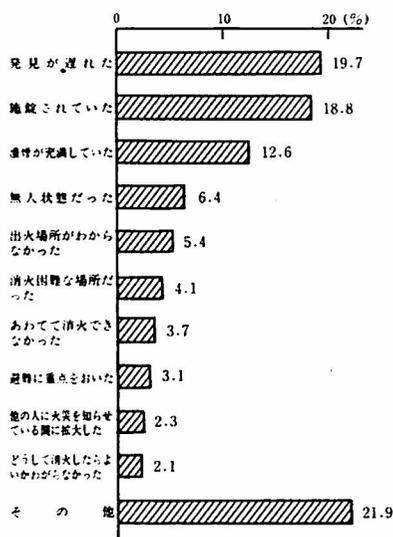


図2 出火時刻別初期消火従事率



(昭和60年中の東京消防庁管内初期消火不従事建物火災, N=517)

図3 初期消火不従事の理由

(「火災の実態」(東京消防庁), 昭和61年版より)

1. 初期消火従事率は、深夜で6割、昼間で7～8割である

建物火災が発生したときの施設関係者等の初期消火従事率は、全建物火災の7割強を占める(図1)。

しかしながら、深夜の火災では6割前後、昼間では7～8割の従事率である。なお、夜の調理時間帯(17時～20時)の従事率が最も高く、8割をこえている(図2)。

東京消防庁の刊行している「火災の実態」によれば、初期消火不従事の理由のトップは、「発見が遅れた」である(図3)。このことから深夜の初期消火従事率が低いことの背景には、「就寝中」→「火災発見の遅れ」→「初期消火不従事」という構造があると推測される。

2. 台所、浴室の初期消火従事率は高く、空家、工事中建物は低い

初期消火従事率は出火箇所によっても異なる

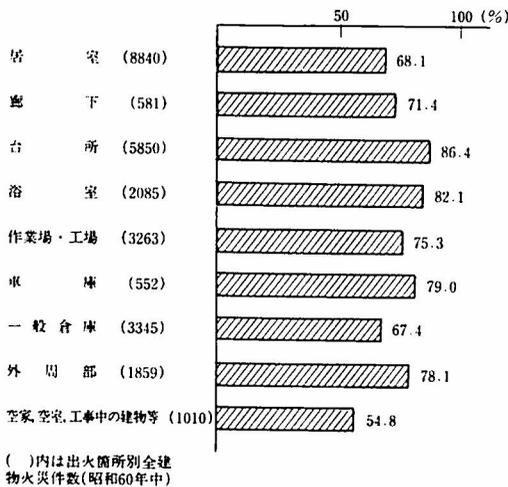


図4 出火箇所別初期消火従事率

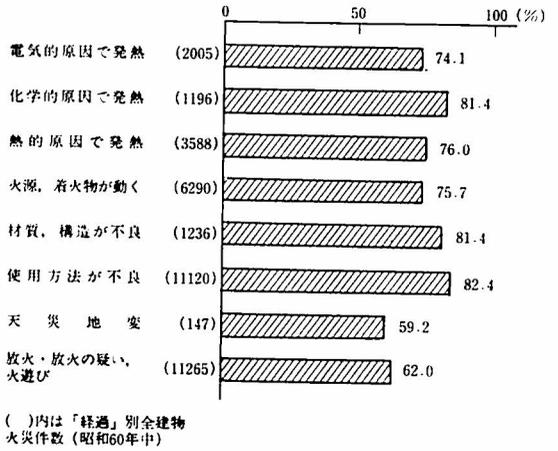


図5 「経過」別初期消火従事率

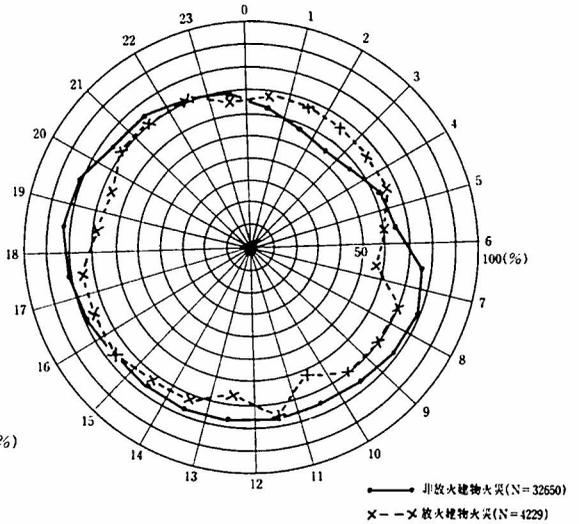


図6 出火時刻別初期消火従事率(昭和60年中)

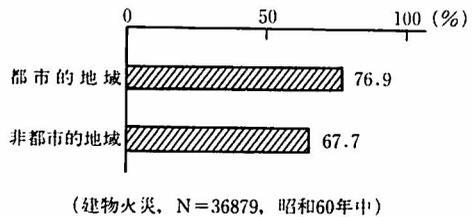


図7 地域別初期消火従事率

り、台所、浴室で高く、居室、一般倉庫、空家・空室・工事中の建物等で低くなっている（図4）。

「空家・空室・工事中の建物等」で特に低くなっていることから類推されるように、初期消火従事率は出火箇所に人の目が届きやすい（出火箇所付近に人がいる）か否か、出火箇所に近づけるか否か等に大きく左右されるものと思われる。

3. 放火火災の初期消火従事率は全般に低い  
が、深夜の非放火火災の初期消火従事率はそれよりも低い

火災に至った「経過」別に初期消火従事率をみると、「天災地変（この場合、主に落雷と考えられる）」に次いで、「放火、放火の疑い、火遊び」を原因とする火災の従事率が低くなっている（図5）。

「放火、放火の疑い」火災（以下、「放火火災」という。）の出火時刻別従事率は、大部分の時間帯で非放火火災のそれを下回って

いるが、深夜においては意外（？）にも逆転している（図6）。

これは、深夜の放火火災は建物外周部からの出火が多く（連載第2回参照）、通行人等の目にとまりやすいことなどが関係していると考えられる。

4. 都市的地域の方が非都市的地域よりも初期消火従事率が高い（図7）

都市的地域の方が火を管理する（火災を覚知する）人の目が多いことが、図7のような結果として現われたのではないと思われる。

前述の2、3とも併せて考察すると、「人の目が届きやすいか否か（出火箇所付近に人がいるか否か）」が、初期消火従事率を左右する大きな要因の一つであるといえる。

以上、初期消火従事率について述べてきたが、次号では、初期消火の成功率とその効果を見ていこう。

この欄へのご意見を歓迎いたします

「この図表はこのようにも解釈できるのではないか」、「消防統計を使ってこのようなことはわからないか」等、本欄への質問、要望、提案をお待ちしております。

連絡先：(財)消防科学総合センター

調査研究課 日野

TEL 0422(49)1113